

以上見て来た様に長谷川泰は、1. 日本医科大学の前身済生学舎を創設して明治期の国民医療を支えた、2. 女子医学生教育に貢献、3. 伝染病研究所設立に貢献、4. 京都帝国大学創立の提唱、

等の業績から改めて評価されてしかるべきものと思われます。

(令和元年6月例会)

## 書 評

坂井建雄 著

### 『図説 医学の歴史』

1966年インターン終了時に、評者はBettmannのA Pictorial History of Medicine (1962)を購入した。学生時代から続けてきた医学史研究の視野を日本から世界に広げるためであった。父の蔵書にGarrisonのAn Introduction to the History of Medicine (1929)を見つけたが、今一つ内容が分からない。もっと具体的に内容を理解出来ないかと考えた末に、丸善洋書部から教えられたのが上記の著書であった。これで評者の世界の医学史に対する理解が大いに進んだ。その後「図説」と冠する類書が出版される度にそれらに目を通してきたが、隔靴搔痒の感を禁じ得なかった。以来、日本語でこのような書冊が出版されないものかと考えてきた。今回、坂井建雄教授の『図説 医学の歴史』が出版され通覧する機会を得た。数十年渴望して止まなかった著書に漸く巡り逢えたと表現しても誇張ではない。

本書の概要を記すと、全26章からなる。第1部は「古代から近世初期までの医学」(9章)、第2部は「19世紀における近代医学への変革」(6章)、第3部は「20世紀からの近代医学の発展」(9章)、第4部は「医史学について」(2章)である。医学が20世紀から急速に発達して現在に至っていることを考慮すれば、第3部に26章中9章を割いていることは当然であろう。本書の大きな特徴の一つは第4部の「医史学について」である。医学史の研究者は、第25章「医史学の歴史」、第26章「現代における医史学の課題」の2章を熟

読する必要がある。この2章に著者の強いメッセージが込められているからである。インターネットの普及などによって易揮発性の情報が氾濫し、医史学研究者の中でさえ、自分が何を研究しているのかさえ覚束ない人、研究のための研究をしている人が間々見られる。少なくとも自己の立ち位置を再確認するために上記の2章を精読すべきであろう。

本書執筆に際して坂井教授はいくつもの険しい障壁を克服されたはずである。評者も二、三の著書を上梓した経験があるので、その困難さを多少は理解している。それらについて記すことは本書の評価にも関連するので述べて見たい。

第1は総論を書くことの難しさである。自分が専攻する狭い分野の史的発展を総論的に書くだけでも多大な労力を費やす。坂井教授は古代から現代にいたる西欧と東洋の文献を博搜して過不足なく記述していることは驚異的であり、至難の業である。評者自身、専攻科目の歴史については多少の自信はある。しかし、専攻科目以外の歴史となると心許ない。資料を読むことは出来ても十分に理解できない。しかし、坂井教授は二次文献ではなく、広い分野の一次文献を能く咀嚼・消化してその要点を我々に伝えている点はうれしい限りである。同様な記述を他書で読んできたが、多くは外国の研究者の請け売りであった。

第2は現代を記述する困難さである。「古今東西」というが、一見簡単に見えて難しいのが「今」

である。日々進化し、見方によっては変容しているからである。評者自身の狭い分野についてもさらに細分化した他部門のことは分からない。この点、坂井教授は、自身の専門分野を含めた基礎医学はもちろんのこと、臨床の諸分野にも細かな心配りをして、さらにその筆はコメディカルの分野にまで及んでいる。常人が容易になし得る技ではない。

第3は史料を実見することの困難さである。画像を視さえすればよいとする考えに評者は組みしない。確かにインターネットの発達普及によって、一次史料の閲覧は以前に比較すると飛躍的に容易になったことは確かである。にもかかわらず、評者は、医学史の研究の第一歩は第一次史(資)料を実見し、その場所に足を運ぶことであると考える。もちろん限界があろう。当然のことであるが、ともすれば等閑に付されがちである。謬見が流布している背景にはこのことが順守されていないことがあろう。この点、坂井教授は出来る限りこのことを実行されておられる。驚異的であるのは16世紀中葉からの稀覯本を含む100点

以上の第1次史料を教授自身が所蔵されていることである。恐らく本書を読んで感ずる迫力、説得力、深みは、教授自身が医学の歴史に名を遺す原著の数々を実際に手にして執筆されたからであろう。評者自身、“本物を見ることの重要性”を認識して少数ではあるが稀覯本を所有し、研究や学生に対する講義に活用したことがある。したがって、これを実行することがいかに難渋であり、しかし意義深いことであるかを十分理解できる。

坂井教授は1993年の「からだの自然誌」以来、数々の革進的な著書を世に問うて来た。それらによって多くの方々が多大の裨益を受けてきた。本書は坂井教授の一連の医学史関連の労作の頂点に立つものであり、日本の医史学界の水準の高さを示している。21世紀初頭のわが国の医学界にとっても金字塔である。

(松木 明知)

[医学書院, 〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23, TEL. 03 (3817) 5600, 2019年5月, A5判, 648頁, 5,800円+税]

坂井めぐみ 著

## 『「患者」の生成と変容

——日本における脊髄損傷医療の歴史的研究——』

評者は整形外科医として過去、脊髄損傷(以下脊損)患者を扱った経験から本書を興味深く拝読した。また、医師ではない著者による医学史の視点からの記述は、脊損を客観視する意味でも参考になった。

本書は大きく2部に分かれ、脊損医療と脊損患者の歴史と脊損者による医療への関わりとの現代史である。前者はさらに、「放置される身体」、「脊髄戦争患者の生成」、「治療・患者体制の形成と強化」、「社会復帰の論点化」、「パラリンピック東京大会のインパクト」、「リハビリテーションの再編成」、「標準治療と臨床研究」の章で構成されている。この第1部は整形外科医にとっては既知のこ

とであるし、新奇なものは少ない。ただ医学史を学ぶ上においては、熟読に値するものである。ことに如何に脊損者の認識が過去世間で疎んじられてきたか、あるいは戦時中生じた患者の悲惨さ、この疾患の無情感などである。脊損に若いころから情熱を注ぎこまれ、評者が直接指導を受けた天児民和博士、本邦でのパラリンピック開催に尽力し半生を身障者の社会復帰に捧げた、中村裕博士などの名前が引用されているのは、両博士に評者が直接接しただけに、当時の様々のシーンが蘇ってきた。長期間臥床を余儀なくされた脊損患者との会話、慰め、感染・褥瘡の処置と導入が始まったばかりのリハビリテーション(以下リハ)など